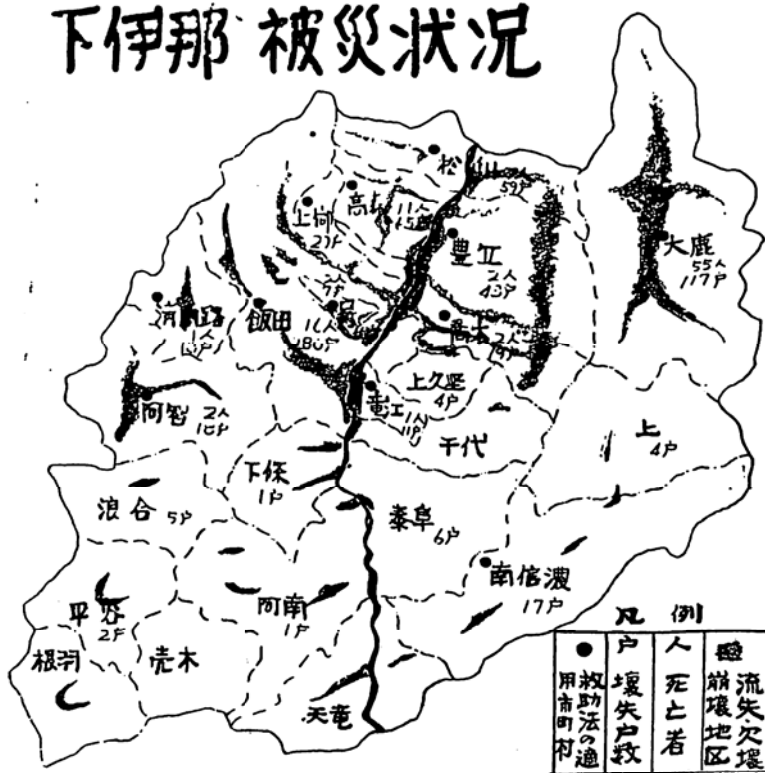


伊那谷の大水害
記録写真帖

伊那谷をおそつた 集中豪雨のつめあと

〔36年6月梅雨前線豪雨被害記録〕

下伊那 被災状況



伊那谷飯田地方は六月二十三日から降り始めた雨で各河川は次第に水位をましていたが、二十六日からは間断なく降り続き、二十七日午前九時頃から豪雨となった。

二十七日から飯田地方は梅雨前線の直下におかれ、この前線の上空には強いジェット気流が西から東へ吹いており、1立方メートル20グラム以上の水分を含んだ湿った空気「湿舌」が御前崎から天龍川上空を北上して前線へ流れこむ結果となり、集中豪雨となるいろいろな条件がそろっていたのである。

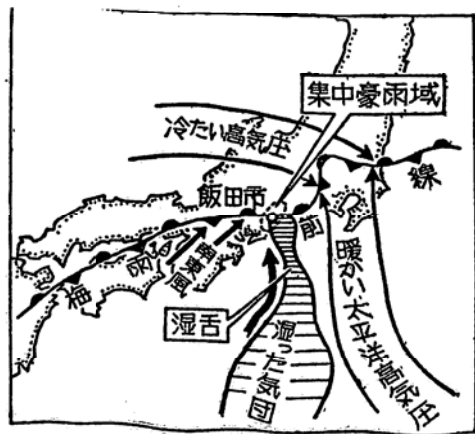
二十八日朝六時までに飯田測候所開びやく以来の447ミリの雨量を記録、その後の梅雨前線による連続降雨量は642ミリとかつてない記録をのこした。伊那谷の過去五十三年間の平均年間雨量が1655ミリであるから、この一週間に降った雨は年間の三分の一に相当する。

伊那谷一帯が危険な土砂崩壊地帯であることも大災害の原因であろう。天龍川の両岸にそつて一見美しい洪積層の段丘があるが、地質的には堅くてもろい花こう岩の上に、戦後の森林乱伐でハゲ山が多く「鉄砲水」となり易い。今回の犠牲者も山ぞい、沢ぞいの農家で崩落の下じきとなっている忘れられた僻地のため国の治山治水事業も遅れ、天龍川をはじめ小波川、アブ川、田沢川、大島川、野底川その他のあらゆる小河川が異状なはんらんをしたのである。

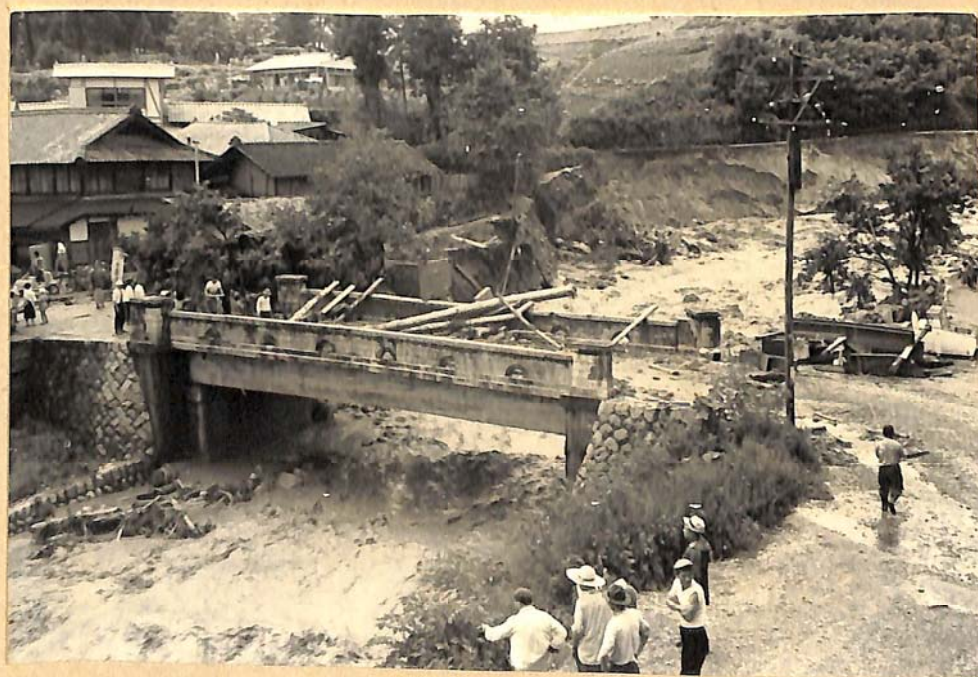
六月の梅雨前線豪雨の残していった被害は、大鹿村を最大として、死者100名、重軽傷者770名、家屋の流失全壊600戸余、被害者は34000人に上り、被害額は約170億円といはれる。

この写真集は地区的にも時間的にも不完全なものではあるが、未曾有の大被害を記録しておく一助にと、各地のアマカメラマンが危険をおかして撮影したものを収録したものである。一部航空写真は毎日新聞の好意による。

当時の気象図 (中央气象台調)



飯田市 (野底川一帯)



- 27日深夜より28日未明にかけて、野底山の鉄砲水により金山製縮工場の一家7名をうばった大門町野底橋附近の惨状。欠壊した道路は国道名古屋—塩尻線
- ひつじ満水(1715年)の再来といはれる鉄砲水にヒン曲げられた野底橋
- 上方の大きくえぐられたガケ崩れが金山製縮工場あと



- 野底川により国鉄線桜町駅附近に押し流された流木の山、一時はここが大貯水池と化した
- えぐられた線路わき
- 風越高校、浜井場小学校下のガケを大きくえぐった洪水のあと
- 上の貯水が一時にトンネルを抜けて吹き出したため大王路の一部を流失する
- 校庭の一部をけずられた浜井場小学校附近より上流を望む。



- 高校生、PTA、消防など総出で小伝馬町附近の防水作業
中央は小伝馬橋
- 流失した県道と小伝馬橋
- 濁流に洗はれ四戸を流失した浜井場市営住宅附近
- 小伝馬橋より上流方面 元内山花火工場あと附近
- 流失した加賀沢橋 野底川はこゝから二分して一方は谷川線尻を一方は上郷村別府方面を流した
- 自衛隊、米軍から救援のヘリコプター25機が到着 城下グラウンドにて



- 東中央通り方面の洪水あと。中央は東中央通り、左は水の手、左の町は泥土にうもれた東中央通り及び鼎町で新飯田橋へ続く。右下は市汚水処理場
- 28日早朝の松川と新飯田橋
- 新飯田橋上へおしよせたおびたゞしい漂着物
- 新飯田橋を洗う松川
- 28日早朝東中央通りを流す野底川のはんらん



- 28日午後ようやく水が引き河原と化した国道飯田＝豊橋線、東中央通り一帯
- 城下グラウンド入口付近へ漂着した材木の群
- 同上
- 流れついた石と材木の中の民家
- 河原となった道路 東中央通り





- 二階迄泥土にうもれた東中央通り。28日早朝
- 東亜石油会社の一階をうずめて流れるダク流28日早朝
- 附近へ流れて来た三輪車
- 倒壊寸前の民家 マムシ坂入口にて
- 土砂にうもれた民家
- 岩石と流木におぼれた東中央通り



- 28日早朝 巾広い瀑布状となって松川へそゞく野底川のたく流。污水処理場附近
- 同上水の引いた28日午後
- 污水処理場入口 むつみ橋附近
- 上郷村蟹江医院附近
- 流失した金沢橋あと。 上郷別府方面
- 上郷村別府の田地を荒れる野底川の水。28日早朝

飯 田 市 (丸山地区)



- 市内丸山一帯を流し市中迄泥水を押し出した虚空蔵山の山抜けあと
- 滝の沢堤の欠壊で丸山市営住宅附近へ濁流が流れこむ
- 貯水池附近
- 滝の沢の濁流は砂払から大平街道、白山町を流れ下り知久町商店街は市内浸水に大騒ぎした。 砂払附近の消水作業



- 新栄電機KKをうすめた土砂。
- 押洞の半壊の民家
- 押洞堤の欠壊にて市営球場附近の松島産業が流失し死者二名を出した。
- 市営球場へ流入した土砂はダッグアウトを完全にうすめた。ホームプレート方面
- 同 外野方面
- 球場より高くなった王龍寺川に境された外野のトタン塀



- 球場附近の惨状
- 全 特に丸山三四区の被害が激しかった。
- 同 上
- 倒木や石が流れこんで惨たんたる丸山の果樹園地帯
- 家屋をうすめたおびたゞしい土砂
- 同 上



- 今宮通りを流れるたく流
- ようやく川を掘って水路は元にもどったが……
- 今宮町三本杉附近 押洞の水は今宮町から羽根垣外をたく流となって飯田駅構内へ流れこみ一時はホームを埋めて中央通り、通り町へ散流し道路を河と化した
- 同左 川はうまり球場へ通じる道路上を流れる濁流を防ぐ人々。28日午後
- 同 上 28日早朝
- 丸山七区附近



- 水の引いたあとの丸山七区から松岡屋方面
- 水の引いたあとの松岡屋方面
- 水の引いたあとの松岡屋方面
- 今宮町附近の散乱した路上 28日午後
- 丸山小学校プールを埋め、校庭へ流れこむ濁流

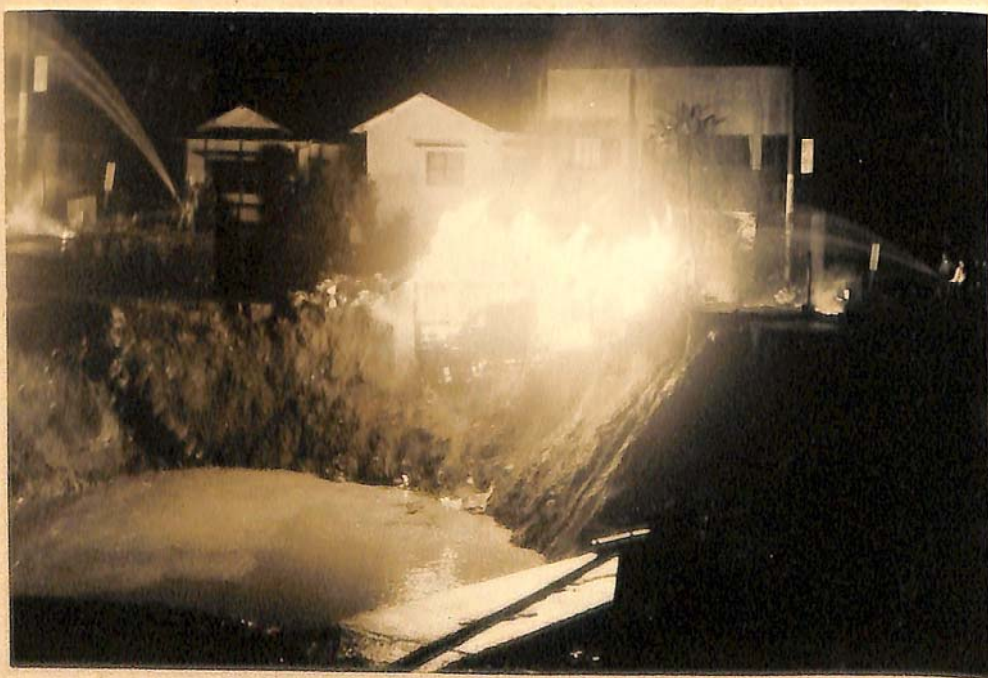
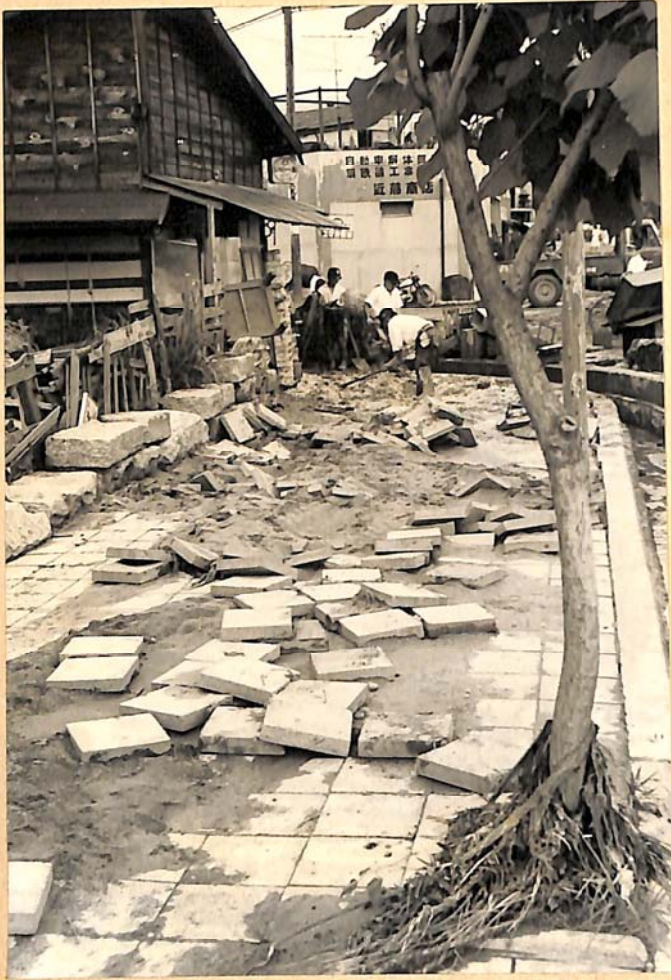
飯田市 (市内各地)



- 知久町一丁目附近の道路清掃丸山方面からの洪水がこの辺迄泥を運んだ
- 知久町 飯田病院前を流れる泥水
- 知久町三丁目の泥の道
- 飯田線 知久町踏切りも水につかった
- 知久町四丁目
- 知久町二丁目附近に洪水の残して行つたどろの山
- 銀座四丁目のどろの山

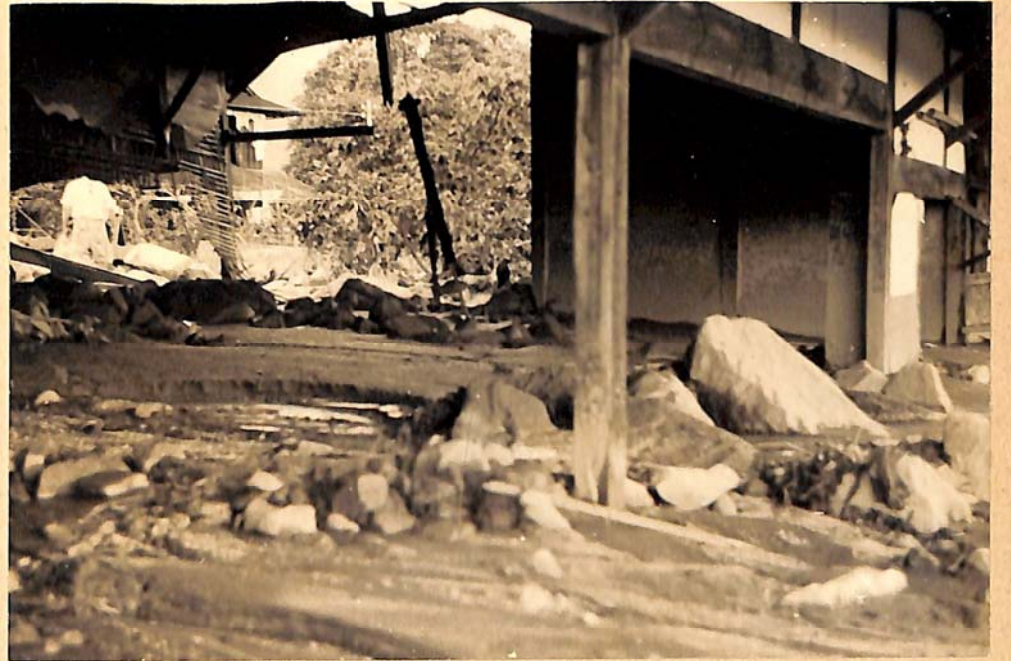


- 一時はどろ水につかり無人駅と化した国鉄飯田駅附近のどろ除け作業
- 新道水の手へ崩落した土砂
- 倒壊の危険にさらされた大久保町旧大久保小学校対岸
- 東中学校前附近
- 東中学校前へ掲示されたお休みのしらせ
- 源長川の氾濫により流失した大久保二号橋



- 歩道の上迄あふれた洪水に散乱する舗石。市内吾妻町附近
- 荒廃した吾妻町附近の児童遊園地
- 長姫町の大穴横の民家を避難させた後の焼却作業 28日夜中
- 国道飯田=豊橋線 長姫町パレーコート横にあいた径30メートルの大穴
- 同 上
- 同 上 市内で最も交通量の多かったこの長姫町が不通となり、市内から外部へ通ずる道は大通り～切石経由のみとなった

伊 賀 良



- 笠松山南沢の山津波により田地30町歩を流失流失家屋26、半壊20、重軽傷14を出した伊賀良北方大瀬木部落
左上方は北方佐倉線と扇状にひろがったほう大な土砂
- 国道 塩尻—名古屋線もどろにかくれた伊賀良農協附近
- 広河原となったシチズン平和時計工場附近
- 民家を押倒してどろどろと岩石が流れさったあとの惨状
- 農協附近



松

尾



- 弁天橋に激突する天龍のたく流対岸は下久堅27日午後二時頃
- 弁天橋より下流を望む。堤防は欠壊寸前名物の弁天様の姿が無い。27日午後
- 無数の山崩れあとをのこしてシマ模様になった山肌 南向方面
- 弁天橋の欄干におそいかゝる天龍川の満水27日午後
- 28日早朝 欠壊した弁天下流の沖島堤防。白く見えるのは明、下島の水田地帯



- 堤防を破った天龍の水は水神橋の手前明河原から県道をのりこえて下島へ流れこむ。 28日朝
- 冠水した明河原の水田
- 冠水した明河原の水田
- 毛賀地籍より水神橋方面を望む
- 水神橋へのり上げた木片。水神公園も流失した殆んど形ばかりとなった。
- 南原橋上より天龍川上流を望む 28日朝
- 完成直後流された国道飯田＝豊橋線の毛賀附近 ヒン曲ったガードレールが痛々しい。

竜 丘



- 時又＝龍江間天龍橋上より望む。時又附近の天龍川濁流が正に民家へ流入せんとする27日午後4時頃
- 同上の流失した悲惨な跡 7月1日午後
- 一大人造湖になった川路龍江の大洪水 龍江村より望む
- 時又天龍橋上流より川下を望む
- 28日朝の時又新しい橋附近の浸水
- 日本一の大桑園をうすめてゆく天龍川のこう水。龍丘、川路境 27日午後4時頃

川 路



- たく流に孤立した川路小中学校 最高水位（27日夜半）は二階窓の半分位迄あったとのこと 28日午後
- どろにうもれた市役所川路支所前
- 水のひいたあとの国鉄川路駅前附近
- 川路駅附近 28日午前

天 竜 峡



- 天龍峡ホテル風呂場付近
- 姑射橋上より下流を望む。仙状盤をはじめ奇岩怪石は全く水の底にかくれ、流を流れゆく木橋。28日朝
- 同上 平水時の天龍峡々谷建物は龍峡亭
- 7月5日災害地を視察の建設大臣に窮状を訴える被災者。龍江村にて
- 天龍峡ホテルを洗う大満水
- 姑射橋アーチ上部へせまった洪水。最高水位はアーチ頂上から50センチ下までであった。 28日午前10時
- 7月10日市内善勝寺に 600 人の被災者が集って、泰阜ダム撤去同盟を結成す

大
鹿
(四
徳)



- 29日午前9時40分大音響と共に崩れた大鹿村大河原の大西山と手前大河原部落 このため土砂が1300メートルも押出して小渋川をせき止め、山すその大河原、下市場文満36戸を一瞬に埋め42名の死者と500余人の重軽傷者を出した。
- 大西山の巨大な崩落土砂と瀬を変えた小渋川埋没流失した家屋の散乱の文満部落の惨状
- 大西山くずれに大破した大河原中学校体育館





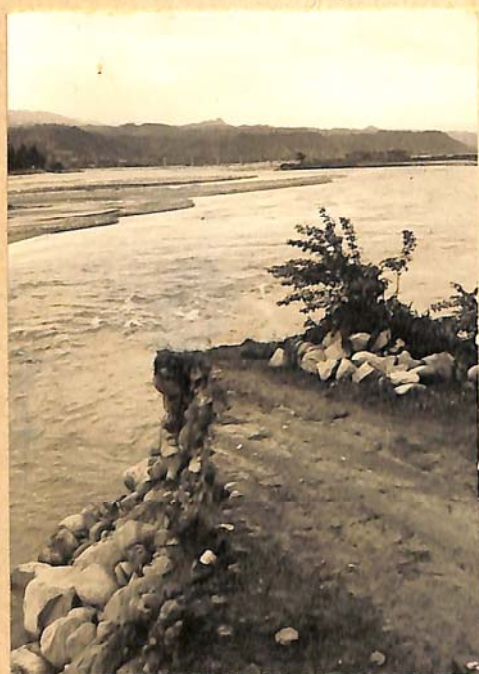
- 体育館から大西山を望む
- 中川村四徳は83戸の部落中45戸が全壊、田畑75%流失死者7名を出して潰滅的な打撃を受けた。四徳分校附近
- 上空より望む大河原と大西山のくずれあと。中央は青木川、小波川の瀬が大きく曲つている。

生田・山吹



- 松川町生田は小河川の氾濫と無数の山抜けのため流失埋没59戸死者9人を出し被害額は同区のみで10億円に達した
- 北部最大の被害地の高森町山吹。大沢川はんらん現場
- 同 上 山吹下平地区 田沢川のはんらんにて死者11名を出した。
- 左 同
- 田沢川に荒らされた国鉄下平駅附近。待合室ホームを流失し飯田線で最大の被害を出した。

市田・豊丘・喬木

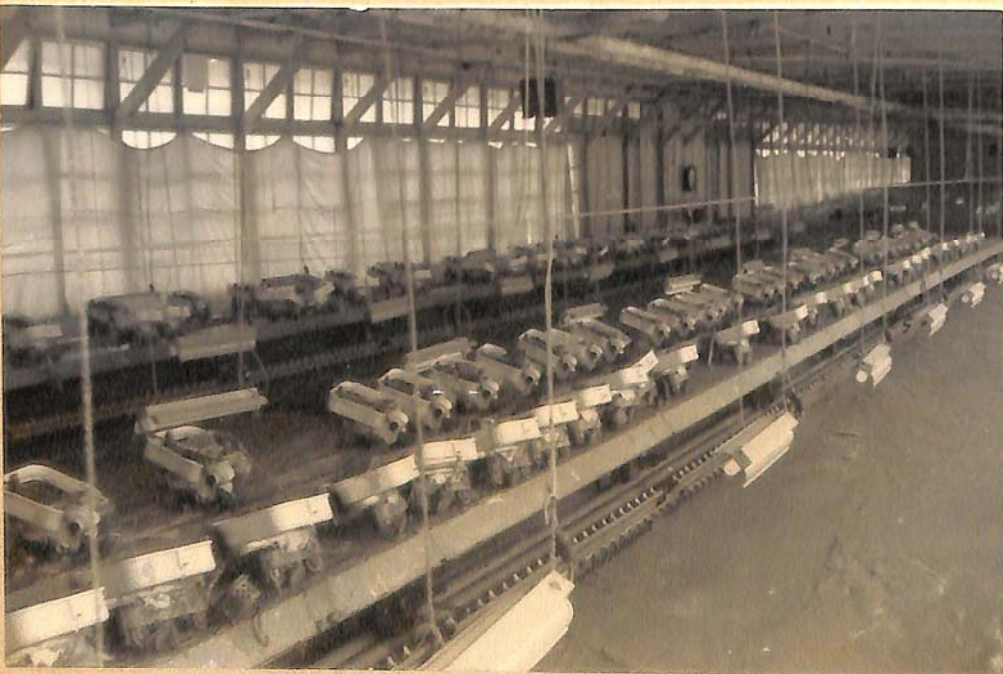


- 出砂原堤防の水防作業
- 欠壊後の惣兵衛堤防
- 不眠の水防作業を行う惣兵衛堤防
- 28日伊野堤防欠壊にて豊丘村伴野、小園にかけて17戸が流失
- 宝暦2年(1752年)中村惣兵衛が築造後200余年に亘って欠壊しなかつた名物惣兵衛堤防、大こう水の前について29日夕欠壊した。次第に堤防をけずられてゆく欠壊寸前29日午後3時頃の惣兵衛堤防上にて
- 農民の悲願をこめて堤防につまめた土のうの山
- 松尾千振が明治35年完成した伴野堤防も欠壊水田へ流入する天竜の洪水



- 天竜川上流の洪水風景
- 上方は大島台城、中央明神橋をはさんで左高森町出砂原、右豊丘村田村、左惣兵衛、右伴野の両堤防欠壊が良く判る
- 豊丘村河野宮前附近
- 29日朝喬木村伊久間の崩落を補修しながら飯田市へ向う自衛隊の先発隊
- 豊丘村河野、神穂境附近。あふれんばかりに満水の寺沢川
- 県道をうすめた民家を押しつぶし喬木村里原の山くずれあと

天竜社市田工場



- 国鉄市田駅附近の鉄道をのりこえて天竜社市田工場へ流れ込む大島川
- 一基 800 万円の自動操糸機の上を濁流が流れてゆく 29日午後 4 時
- 工場構内をほとんど埋めつくして尚土砂が流れ込む
- 全 上
- 全 上 構内に無気味に流れるたく流



- 手前大島川のはんらんにより莫大な土砂に埋没した天竜社市田工場全
景。被害額は二億円といわれる
- 近隣の労組員が応援にかけつけて除泥作業中
- 社宅内を無情に流れる濁流
- 大島川の突破口。天竜社上部附近
- 一面の砂原と化した高森町吉田の水田地帯



正徳のひつじ満水

今度の集中豪雨は時期も、規模も「正徳のひつじ満水」と全く良く似ているといはれる。伊那谷で今も語り草となっている「ひつじ満水」について郷土史家村沢武夫氏の調べによる古文書の記録を見てみよう。

正徳年間といえは今から二五〇年前であるが、正徳元年九月には当地に洪水があり、同三年九月には時ならぬ豪雨が降り、四年八月八日夜松川がはんらんして、山村一帯が水浸りとなった。更に正徳五年六月十七日から雨が少々ずつ降り出し、十八日から大雨となり有名なひつじ満水が襲来した。主税町木下印刷の祖先木下勘左衛門の筆記によると「十九日の八ツ頃に大雨となり、南風出で半刻ばかり強く降り、岩崩数有之、大水出にて世間死人多く、野底山押し、野底にて家流れ人馬共に死す。大石柿木島に押かけ、此時柿木島出来候」とある。やはり今回の水害と同じく野底上流にたまった雨が鉄砲水となって上郷村上、下黒田、別府部落を襲ったのである。此の時のすさまじさを伝えるものに別府の「夜泣き石」があるが、大石の下敷きで死んだ子供の泣くと云う哀話が残っている。飯田世代記によれば此の時の被害は飯田領内二十八ヶ村だけでも、流失五十六軒、浸水半壊家屋六十二軒、流死三十二人、堤防欠壊二千五百八十間、落ちた橋九ヶ所と記録がある。

北方村旧記(市内伊賀良)と云う古書によれば、風越山の山崩れがあり、円悟沢から伊賀良大井に押し出し、須志角十八軒が押し流された、これは猿庫の名水の所の窪地から、風越峽の下の伊賀良井の取入口のところに押し出し、県営住宅が建てられている辺りの須志角北籍に押し出したものである。

又郡下の様子を伝える山吹藩資料(高森町)によると「夜明け頃から大雨となり、膝を列べて話す話も聞き取れず、田沢川の水が押し出した時は百千の雷が鳴るように地へ響き、先年富士山の爆発の

音より大きく、山中の猪どもも驚きで馳け出しうるつき、天竜川には土台のついたまゝの立家が流れ、酒屋も流失したと見え、五尺と申す大酒樽が流れ、天龍川は丁度諏訪湖の如く」と記されている。下市田の出砂原は、大島川が満水になって出来た所で、市田駅前の山三魚店の裏庭にある直径五米に三米もある大石も、この時の石だと云う。近くにある月照庵入口には「前亡後死三界万霊」正徳五年乙未六月十八日云々の供養塔が残されている。今度と全く同じ場所がはんらんしたのである。

ひつじ満水から三十七年後の宝暦二年(一七五二年)に飯田城主は天龍川の洪水を防ぐため、中村惣兵衛に命じて下市田に出来たのが惣兵衛堤防であるが、その後二百余年の歳月を耐えて来て今度の集中豪雨でもろくも欠壊した。

ひつじ満水以後記録に残された洪水は飯田領洪水史で見ると天正五年から明治三十年の三百年間に一二三回起っている。その内特に激しいのは次のよう。

- ◎正徳五年六月十八日(一七一五)ひつじ満水
 - ◎享保四年八月十五日(一七一九)亥年満水
 - ◎寛政元年六月十八日(一七八九)酉年満水
 - ◎文化元年六月二十八日(一八〇四)子年満水
 - ◎文政十一年七月一日(一八二九)子年満水
 - ◎慶応元年五月十七日(一八六五)
 - ◎明治元年八月一日(一八六八)辰年満水
 - ◎明治十五年十月一日(一八八二)
 - ◎明治一八年六月?日(一八八五)
- これで見ると伊那郡では、六月から七月の洪水、つまり梅雨前線の集中豪雨によると思はれる洪水が特に警戒を要する事が判るが、更にこの記録から大水害が年度的に毎回三、四年毎集中して発生しているのも伊那谷水害の特徴である。

この写真帳に収録された写真は他に転用が出来ません

飯田市下常盤町52

発行所 **KK 信映プロダクション**

TEL 3160 番